

風を継ぐ者

蔵島ミト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——来る運命の日、男は少年に、たったひとつの贈り物を渡した

目次

始まり	1
始まり2	8

始まり

それは、雪の降る夜だった。

誰もがその日の仕事を終え、また明日を迎えると信じて疑わなかった。

明日も変わらず平和だろうと、無意識に誰もが思っていた。別れを告げると、また明日と交わされる声。

其処に在るのは笑顔、幸福――。

――そう、皆幸せだったのだ。

事の始まりはたったひとつの爆音から。

そこから連鎖する悲鳴と怒号。その地に住んでいた人々の幸せの形は、跡形もなく消え去った。

爆音に巻き込まれ、その命を落とす者が数名。結果として、何も知らないままその人生を終える事になったその数名は、言うなれば、最後の幸福だったのかもしれない。

――ならば生き残った者達はどうか？

その命を取り止めた者達は皆空を見上げた。

日は既に落ち、辺りは暗くなっているにもかかわらず、夕暮れ時に戻ったかのように明るい。

そう、村が、家が燃えているのだ。

その事に気が付き、消火しようとする者もいれば、爆音の犠牲になって、今正に死に絶えようとする者を助ける為に奮闘する者もいる。他には、とにかくその場から逃げる事を選んだ者、ショックで声すらでない者。親しい人、愛する人を失って嘆く者もいる。他にも他にも他にも―― 挙げていけばキリがない。

そして違和感に気が付くものが数名。

その目線は今だ空に固定されている。

何か何かとその正体を知るべく、ジツと遙か彼方を見通している。

そうした緊張の中、誰かがポツリと呟いた。

「……あれは……なに？」

眩いたであろう者が、疑問をもった空に向けて指を指す。

其処に広がるは暗闇。村が燃えて明るくなつたとしても、天に広がる空の色は黒である。それでも若干見える何かがあるだけのこと。

あれは何か？あれは何か？それは誰も知らないし、知るはずもない。よしんば知っている者が居るとするならば、それはその事に知識が有るものだけ。

——そう、魔法に。

そこで漸く空に居る何かの正体を看破した者が一人、二人と出てくる。いずれも魔法に手を付けている者だ。

一番最初に看破した者、その者はさながら、村の長老といったあたりか。

その長老の目付きが鋭くなる。知った者であるがゆえに、その危険性も重々に承知している。

——何故、あれがここに居る？

何故、何故、何故と思考はただただ疑問ばかりが浮かんでは消える。

そうした自問自答の果てに行き着こうとしていた思考は、再び見上げた空の暗闇にかき消された。

それは至極当然の事。ただ見えなかつただけの事。気が付かなかつただけの事。それは一体の魔族。

違う、夜空に浮かぶは幾体もの魔族だ。

闇夜に紛れてその体を隠していた魔族は、遂にその正体を自ら露にした。

——

その言葉は人にはわからない。

その音は人にとつての害である。

その眼差しはとどのつまり——

——人にとっての死刑宣告である。

そこから人々にとっての、短くて長い悪夢が始まった。
ただの人が魔族に勝てるはずもなく、対抗すら出来ない。

圧倒的に個体としての力が、能力が足りていないゆえの敗北。その命は秒を追う毎に食い散らかされ、踏み潰され、破壊されていく。暴虐の限りを尽くす魔族達は嘲笑しているかのように、人々を蹂躪する。

それでも何とか生き残る為に、同胞を守る為に、助ける為に動く者たちが居る。

そう、その村に住む魔法使い達だ。

若い者から老いた者、男、女。色々な魔法使いが其処にはいた。
だが、目の前の脅威には恐怖を感じていないわけがない。当たり前だ。そうならないものは、ただの馬鹿か、はたまたただの命知らずのみ。

此処に集う者達は皆、自分達の日常だったものを少しでも取り返すために、その震える足で立っているのだ。

——
魔族との意思疎通は叶わない。ならば其処に交わす言葉など一切不要である。

多対小。優勢なのが魔族なのは既に解りきっているがゆえに——

「いくぞおおおおおおお——!!!」

何よりも誰よりも村の存続を願う老いた男の啖呵を皮切りに、激戦の火蓋が切つて落とされた。

——先手必勝。魔族共に遅れを取る必要は欠片もない。繰り

出される攻撃魔法は正に多種多様。

あるものは火を使い、あるものは水を使う。

あるものは土を使い、あるものは風を使う。

それらが織り成す千差万別の魔法は正に万華鏡。

幾重も重なり威力を増す魔法に魔族達は若干の遅れを取るが、たかが人間の攻撃。種別も個体も何もかも違う魔族がそんな簡単に沈む筈もなく――

その動作とその攻撃に何かを感じた魔法使い達は回避の動作を取ろうとするが、不意を突かれたところもあってなのか、完全に回避をすることができずに、数名が一閃をくらう。

ただの一閃。しかしその一閃は決して多くはないが、確実に数名を戦闘不能に追い込んだ。

それは石化である。

その攻撃を受けたものは、人によって石化する速度は異なるが、最終的には完全に石と化してしまう危険な呪い。

それを受けた者が数名。

己が石になっていく感覚に絶望して一瞬で何もかもを諦める者。石になるのならせめて、一矢報いる為に最後の魔法を射つ者などがあるが、魔族達には届かない。

思いのままに蹂躪するのみ。破壊するのみ。

それらの想いは全て天に広がる暗闇の様に無に帰した。

そして人数が少なくなつた分、掛かる負担も増えるというもの。単純に手数の問題でもある。

今まで5の魔力で対処していたのが、いきなり7ないし8に増えるのだ。己の魔力が続く限り奮闘はするが、それも時間の問題である。

この圧倒的劣勢を打開するためにはどうしたら良いか。

選択肢は複数に。

まずは誰かが助けに来てくれるのを待つか。無理だ。さっきの通り時間がないから選べない。

続いて同胞の誰かが覚醒して魔族達を全消滅させるか。これも無

理だ。ここにはそれほどの潜在能力を秘めた者は誰一人としていない。

ならば最後は居るかどうかも解らない神に頼む他ないだろうが、世の中そんなに甘くはないのが世の理。

結局自分達で何とかしなくてはいけないわけだ。何も変わりはない。

ならば7ないし8を、10ないし15にして文字道理死闘を繰り広げるのみ。

そのようにして駆け抜ければ、何か起きるはずと信じる他ない。

だから信じる。己を信じる。仲間を信じる。ああそれは尊く、素晴らしいものだ。信じるものは救われる。誰かがそう言ったのならば、その様に世界は、宇宙は動く。

そもそも我らは何の罪も無い。何の前触れも無く降って湧いた厄災に蹂躪されているだけ。そんなことは間違っている。ただ幸せな時間があった。かけがえのない毎日があった。それがいきなり消えるなど――

「――ふざけるのも、大概にせんかアアああ!!」

その怒りは正当である。

だが、魔族にはそんな言葉は届かないし通らない。しかし、言葉は通らずとも――

「――?!?!」

その想いは通る。その魔法は届く。結果として数体の魔族は消え去った。

しかしそれは怒りの力。最初は5。次に7、8。終わりに10、15。

今しがた繰り出した気合いの怒号は実に30。

この光景を見た同胞はその顔に少しだけ光が指す。

逆の立場の魔族はと言うと、特に何も感じてはいない。

当然だ。彼らは低級魔族。低級が故に、その瞳に確固たる意思は宿

らない。ただ己の欲の思うままに行動するだけである。

魔法使い達はこの一手を無駄にしない為に、一人一人が一手毎に限界に近い魔力を使って場面を引っくり返そうと試みるが…。

魔族複数消滅させた男の魔力は底に尽きかけていた。

それは至極当然のこと。いくら己が一番長く生きているとしても、勝てない物が必ずある。

老いだ。己はもう激しい動きは出来ないが、普通に暮らす分なら何も問題無かったのだ。しかし現状は違う。激しい動きを要求され、殺傷力の高い攻撃をしなければ行けない。

とどのつまり、体力切れである。

長老はもうその場を動けずにいた。

誰もがその事に気が付いた時にはもう手遅れであった。

だからこそここで別の手が入る。

それは先程逃げて行った人々。武器を背負い、銃を持ち出し、杖を掲げる。

ここから対魔族戦は佳境に向かう。

信じていれば必ずや何かが起こる。

諦めなければ夢は必ず叶う。

そう、これは一切疑わずに己を信じた長老の意地の勝利だった。

援軍が来た。それだけで、掛かる負担は激減される。

皆の表情に次々と光が射していく。

だが忘れてはならない。自分達が何と戦っているのかを。誰を相手にしているのかを。

それは魔族。そう、魔族だ。

それも低級の。

ならば中級の魔族が居ない訳がない。

ならばそれは何処に居るか

それは今もなお炎上し、燃え続ける家の中にそいつはい

た。

辺りには何かの塊が散らばっている。

色は赤黒く、不規則に動いているものもあれば、完全に止まっている物もある。

赤黒い塊の中央に立つ、角の映えた黒いナニカ。それこそが、中級魔族であった。

食事が終わった中級魔族が、食後の運動とでも言わんばかりな感じで低級魔族達と合流を果す。

食後の運動とは名ばかりの全力ダッシュ。

その威力は車が孟スピードで走ってくるのと同じで、それに轢かれたらどうなるか。

答えは簡単。人は死ぬ。

援軍が来るやいなや、瞬きの間に状況は再び劣勢になっていた。

——悪夢はまだ終わらない

始まり2

物陰で、事の流れを見ている者がいる。

誰にも見つからないように息を潜めて。見つかったら何かが終わる。そんな言い様のない何かを感じながら。

その物の外見的な特徴をあげるならば、まだ若干幼いのと、髪の毛の色が赤いという事だ。爆風に巻き込まれたのか、その頬は煤で黒くなり、身体中くまなく怪我をしているが、辛うじて生き長らえているようだ。

頭からは血を流し、腕は折れ、足は痣だえらけ。恐らく他の骨も折れているだろうし、怪我をした所から絶え間なく血が流れている。痛みと苦しみで呼吸すら儘ならないものの、息絶える予兆は欠片も見受けられない。

痛みと苦しみに耐えながら周りを見渡すと、そこは辺り一面、見渡す限りに火、火、火。

家は崩れて原形を留めていない。そもそもなぜ、自分は生きているのか。運が良かったのか、それとも、生き残ってしまったことは運が悪かったのだろうか。考えても答えは出ることはないだろう。

まだ幼い故に、そこまでの思考力がないとも言切れる。だからこそ、この状況をどのようにするかすら解らない。

そもそもこんな事は初めてである。

それが普通だし、そうでなくてはいけない。

幸せのまま過ぎ、笑いながら人生を見据え、迷いながら生きていく。それこそが、人に与えられた、この世に産まれた者の性だろう。

だのに何故、このような事が起こるのか。

それはきつと、誰かが望んだのだろう。

でなければこのような事は起こるはずもないのだから。しかし、そんな事はどうでもいい。

誰か助けて。誰か助けて。

誰にも頼れないこの場面において、そう思うのは仕方のないこと。誰だつてこの悪夢から救つて欲しいと切に願つているに違いないし、実際そうである。幼いその身に出来ることなど、たかがしれているのだ。

それでも、今は誰かにすぐる事しか出来ない歯痒いこの想いが消えることはないだろう。だからこそ、精一杯にその小さな手を握り締め、天に祈りを捧げる。痛いのはもう嫌だ。苦しいのももう嫌だ。ならば願う事はただひとつ。

—— 助かりたい。ただそれのみ。

「おねがいします。：！だれか、だれか。：！たすけてください——」

何処かの誰か、どうかお願い。この悪夢を終わらせてほしい。他には何も望まない。

誰にも聴こえない、おそらく自分にすら聴こえないであろう小さな小さなその声で、赤毛の少年はそつと祈りを捧げた。

く

—— おう、必ずこの悪夢から助けてやるから待つてな。

絶えず感じる救いの念。その種類は老若男女訪わずに、留まる事なく、ひっきりなしにやって来る。

誰も彼もが血を流し、涙を流し慟哭するその姿が、脳裏に映し出される。死んだ者もいる。生き残つた者もいる。戦っている人達がいる。逃げて行つた人もいる。

その事に顔を歪ませ、最高速で目的地を目指すその者は、赤毛の男性で、ローブを身に纏っている。

己が故郷を壊滅させられて怒らない者はいないだろう。焦らない

者はいないだろう。更には己の家族もいる。気が気ではないのは当然だ。

しかし、それとはまた別に時間がない。

速くしないと色々終わってしまうのだから。何が足りないかと言うと、まず己の時間がない。猶予はあるが、悠長な事はしてられない。己に出来ることが限りなく制限された状態で、この身は現在進行形で不安定なのだ。だがそれでもやはり出来ることはあるのだ。

制限された中で、許された行動を全力で駆け抜ける。

それこそが、今の己に課せられた使命に他ならない。

誰の意思も意見も介入していない。

真実、己自身がそう決めたのだ。

しかし、そう言った輩を、行く手を阻む者は必ずいるのだ。

低級の魔族の軍勢。

しかし、魔族が相手をするのは最強と謳われた赤毛の英雄である。

その戦闘力の差は一目瞭然だ。

雑魚が群れを成して挑んできても、最強には到底叶わない。羽虫が暴風雨に敵う道理は欠片もないのだから。

赤毛の男の快進撃は止まらない。魔族の群れに爆速で突っ込んで、辺りを蹴散らしながら進んでいく。

だからこそ、目的の地まで一直線で、後ろを振り向かず、止まらず、突き進むのだ。最速で、最短に。だから――

「――もう少しだけ、持ちこたえてくれ！」

英雄の到達はいまだ遠く、そして近い。

そして同時刻、場面を引つくり返されて再び劣勢に追いやられた魔法使い達は、ほぼ死を悟った。

ああ、これで終わりか。ここで終わりか。もう無理だ。言葉にしながらも雰囲気は伝わる。解ってしまおう。

低級の魔族にすら苦戦を強いられたのだ。それが今度は中級の魔族が相手になるなんて夢にも思わなかったのだから。しかしこれは悪夢である。最悪の状況なんてものは更新されていくもの。希望何て何処にも無い。ただ無慈悲に、ただ残酷に。それこそが悪夢。

しかし、何故か戦闘が再開されずに、どちらとも睨み合ったまま静かに時が流れていく。だが、違う

ただ休んでいるだけなのだ。そう、食事をした後ゆえに。

人を喰らい、腹が膨れただけなのだ。

その事に気が付いた魔法使い達一同は、その事実には驚愕し、悲嘆し、怒り狂う。

—— 貴様アアアアアアアア!!!

咆哮と共に一斉に駆ける魔法使い一同は、狙いを中級魔族に定める。その刹那——。

他の奴らなど知ったことか。我らが仲間を、村の人々を、よりにもよって食しただと？

石化を受けて砕かれたのならまだわかる。許せぬが筋は通っている。他にも普通に刺され、穿たれ、切り伏せられ死した仲間もいる。それも解る。

食されたのならば、後は残らない。それでもその者を弔う事は出来るが、それでもやはり、遺体はあった方が良いのだ。遺体があれば、最後の別れを告げる事が出来るのだから。

その最後の別れすら奪われた。故に絶対に許さぬ、認めぬ。生かして帰すわけには行かない。

これはもはや仲間の弔い合戦である。

怒りに身を任せた攻撃は間違っていない。魔法とは感情によってその威力が左右される。

怒りとは即ち、殺意である。ならばその魔法には殺す力があるのだ。

だから中級魔族に攻撃が当たらなくても、流れ弾で低級魔族が消滅していくのだ。

ならば後はその手数で攻めるのみ。怒りの激情で現状を打開する他ない。

例え、その命の灯火すら魔法に代えても。

「――！」

だがそれでも手の届かない存在がいるのだ。太刀打ち出来ない存在が居るのだ。

怒りとは、攻撃である。

怒りとは、殺意である。

怒りとは、混乱である。

怒りで状況が把握出来なくなる人は多々ある。だからこそ怒りは――。

――怒りとは、破滅である。

その光景を見たものは間違いなく戦慄しただろう出来事。中級魔族から放たれるこの場の誰よりも速い先制攻撃、石化の極光が魔法使い一同を呑み込んだ。

刹那の内に場は静まりかえる。今だ変わらず辺り一面は火の海。焦げた臭いがそこかしらで漂う。

そこに存在するのは数多くの魔族達。

そして――。

――石にされた、魔法使い達の姿がそこにはあった。

だからこそ、事の顛末を最後まで見ていた者は戦慄し、絶望した。

――何故、何故何故何故!!こんな事になった!

どうしてこの様な結末になった!

祈りは天に届かず、報われなかった。想像以上の虚無感が身体中を支配する。涙はもう流し尽くした。あるのは痛みと苦しみで、他にはもう何も残っていない。もう誰も助からない。もう誰も、もう誰も——！！

「おじぎーん！ネカネお姉ちゃーん！」

その声が聞こえると同時に、身体中の痛みを忘れ、一心不乱に発声元を目指して駆け出す。

もう何も、誰も居ないのだと思い込んでいた。だけれど、まだ生き残っていた。誰よりも可愛い可愛い弟分が、まだ生きていた。

駆け出すと同時に中級魔族が弟の方に意識を向ける。

「——ッ！！」

殺らせる訳にはいかない。最後に残った一筋の光なのだから。それを易々と摘まれる訳にはいかないのだ。

他の人は助けられなかった。痛くて怖くて苦しくて、足が震えて動けなかった。見ている事しか出来なかった。何より、たいして力の無い自分が行っても、足を引っ張るのは明白だった。

でも今は違う。己よりも遥かに幼く、力の無い弟がたった今、命を狙われている。

それを守らなくては何が兄か。

例え従兄弟だとしても、あいつは己の弟で、己はあいつの兄なのだから——！！

「そいつに、手を出すなああああああ——！！」

——助けない通りなど、ないのだ。